

# 「機械と人間・合体への見果てぬ夢か」

中塚 宏行 (大阪府都市魅力創造局文化課主任研究員)

國府理さんの作品との出会いは、2000年の『画廊の視点』(大阪府立現代美術センター)に、アートスペース虹(熊谷寿美子氏)から出品された《自動車冷蔵庫》が最初である。その後、大阪府主催の『大阪・アート・カレイドスコープ』(2008)の『大阪時間』では、大阪市内、北浜から4分ほどの高麗橋の下、東横堀川緑道の柵の中に《ROBO Whale》が展示された。陸の中に閉じ込められてしまったクジラが、機械になって、飛び出して泳ごうとする姿だろうか? 太古の昔は、まだ海の中に沈んでいといわれる大阪という都市の成り立ちと歴史に遡って、思いをはせて制作された作品であった。それ以外では、アートスペース虹で「廃車になった乗用車の内側に、コケなどの植物が貼り付けられて水が滴り落ちていた光景」を思い出す。その後、アートコートギャラリーや西宮大谷記念美術館でまとまった個展が開催され、北加賀屋で追悼の作品展示がなされた。

車好きの若き美術家が、野村仁さんのソーラーカープロジェクトに参加して、単なるエコロジーとは異なる、思索の深化と変遷を経て、作家としての方向性を見出したようである。

その人間と機械とが合体したような作品を見ていると、パナマレンコや、デュシャンの花嫁と機械、ビクトリア朝時代の奇妙な機械の発明などを思いださせる。水中エンジンは、あたかも母親の胎内の羊水のなかで鼓動している機械ロボットの胎児を連想させた。機械と人間のさまざまな関係を追い求め、ヨットと樹、自動車とコケ、有機物と無機物、機械と人間、機械と動物、永遠に交わることのない両者の結婚を夢見ていたのかもしれない。

自ら創作した作品(機械)とともに逝った國府さんの見果てぬ夢は、自らの死によって未完に終わったというべきか、あるいは完結したというべきであろうか? 残された作品は、それを解き明かす鍵となるにちがいない。ご冥福を祈りたい。